

BTC NEWS

BTCニュース

2023年(1) No.130



COMING SOON

全面的な路盤改修・
砂の入替えが行われた 1200m直線砂馬場



新しい路盤材の搬入



路盤整生



砂厚調整

CONTENTS

- | | |
|---|---|
| ① た・ず・な 1
馬の福祉への取り組み | ⑤ 馬に見られる病気 12
育成馬にみられる骨折① |
| ② やさしい生産育成技術 3
アイルランドの生産育成の現状
⑧アイルランドの馬事文化 | ⑥ 調査研究 14
ウマの腸内細菌について |
| ③ 研修生のページ 6
藤澤和雄アドバイザー(元JRA調教師)とBTC研修生による座談会 | ⑦ 研修生のページ 17
～第40期生のここまでの研修を振り返って～ |
| ④ 科学の箱馬車 8
東京2020オリンピック・パラリンピック馬術競技会場に
おける馬ピロプラズマ症の発生について | あとがき 20 |



公益財団法人

軽種馬育成調教センター

Bloodhorse Training Center



日本中央競馬会 理事
菊田 淳

馬の福祉への取り組み

JRAの菊田と申します。昨年の3月から馬事部門を担当しております。よろしくお願い申し上げます。

さて、皆さんは「アニマルウェルフェア」という言葉を耳にしたことがあるでしょうか。日本語では「動物福祉」と訳されており「人間が動物を所有し利用することを認めたくて、その動物が受ける痛みや苦しみを最小限にすること」とされています。この定義においては、たとえ「命を奪う場合においても可能な限り苦痛のない方法を選択すること」が必要です。

動物福祉の対象は一般的に、産業動物（家畜）、実験動物、展示動物（動物園等）、伴侶動物（ペット）および野生動物といったカテゴリーに分類されますが、馬は「その飼育が畜主の経済行為として行われ、その生産物や労働力が人間にとって有用なものとなる動物たち」として定義される産業動物に分類されます。その産業動物を対象にした動物福祉の指針としては、以下の「5つの自由」①飢えと渇きからの自由 ②不快からの自由 ③痛み・負傷・病気からの自由 ④恐怖や抑圧からの自由 ⑤自然な行動をとる（本来の習性を発揮する）自由が国際的に認識されています。つまり、馬を取り扱う場合、この5つの自由を彼らから奪うことがないように留意しなければなりません。

当然ながら競馬の世界でもこの認識のもとで馬に接することが重要です。競走のルールには「馬の競走能力を一時的に高め又は減ずる薬品又は薬剤」であるいわゆる禁止薬物とは別に、「馬の福祉や事故防止の観点から使用を規制する」いわゆる規制薬物が定められています。規制薬物の多くは痛みや腫れを抑える消炎鎮痛剤ですが、そのような治療薬であっても、使用のタイミングを誤ってしまい規制薬物の影響がある状態の馬が競走に参加した場合には、痛みがマスクされることにより大きな事故につながりかねません。このことから規制薬物の使用をコントロールすることは競走馬の福祉にとって非常に重要なことと言えます。

また、馬に対する治療や処置に関しても制限が定められています。例えば、感覚をなくす神経切断術は禁止されています。また痛みを一定期間抑えるショックウェーブ療法や炎症を抑える糖質コルチコイドの関節内への投与などに対しても競走出走までの休止期間が設けられています。さらに、

これまで古典的な治療法として行われてきたものの中で、苦痛を伴うにもかかわらず効果が科学的に証明されていない、焼烙術（いわゆる焼き）、発泡処置（ブリストー）、乱刺術（ササ針）なども現在は禁止されています。日本も参加国となっている世界競馬統括機関連盟では、「競馬と生産及び賭事に関する国際協約（パリ協約）」を定め、その中にこのような禁止行為を規定しています。

競馬において騎手を使用する鞭に関してもルールがあり、パットが入った柔らかい鞭を使用することが義務化され、その使用方法にもガイドラインが設けられています。近年、海外ではこのガイドラインがより厳しいものに変更される傾向があります。JRAでもこの問題に対応できるよう騎手クラブとともに話し合いが続けられています。

最近では地球温暖化の影響で、競馬においても夏季における暑熱対策が非常に重要になっています。馬が装鞍所や下見所にいる時間をできるだけ短くしたり、自由に飲水できる環境を整えたり、出走前後に馬体を水で冷やすことができるようにしたり、厩舎にクーラー設置したりといった環境を整備することで、馬への暑熱ストレスを可能な限り軽減し、熱中症を防ぐ取り組みがされています。

競走馬の福祉に関する問題は、このような現役時代だけに限ったものではありません。少しでも多くの競走馬がその引退後もスムーズにセカンドキャリアに進み、また幸せな余生を過ごせるよう努力することが重要です。これは競馬に携わる関係者全体で取り組む課題と言えます。日本では、このような理念の下で、馬主、調教師、騎手、生産者の代表の方にも参加していただき、農林水産省も交えながら地方競馬全国協会、地方競馬主催者、JRAが一体となって、「引退競走馬に関する検討委員会」を開催しています。検討委員会の参加団体はこのような問題意識を共有し、継続的に安定的な取り組みに協力しています。

乗馬・馬術の先進国でもある欧米の競馬先進国では、引退競走馬は乗用馬としてあまり使われていませんが、日本は他国に比較して乗用馬の資源が少ないこともあり、以前から競走馬が多く活用されています。その意味では、日本は競走馬が引退後に活躍できる余地が大きい環境にあるとも言えます。日本の競走馬がセカンドキャリアとして最も活躍

している場所は乗馬クラブです。全国乗馬倶楽部振興協会には約270の乗馬クラブが所属し、そこには約8,000頭の馬が繋養され、そのうちの65%前後を引退競走馬等のサラブレッドが占めているそうです。その他にも高校・大学の馬術部などがあり、大学だけでも約600頭以上の馬が繋養されており、その多くが引退競走馬です。

前述した検討委員会では、様々な意見が出され、その施策が実行されて徐々に軌道に乗り始めています。その具体的な施策としては、競走馬から乗用馬へのリトレーニング技術を向上させる取り組みや、引退競走馬による馬術競技会開催の支援、優秀な競技成績を収めた引退競走馬の表彰などがあげられます。また、馬の多様な利活用等を推進する施策として、高校・大学馬術部への活動支援や馬とのふれあいの機会を増やす試み、障がい者乗馬やホースセラピー活動等の馬介在活動への支援も行っています。さらに、引退競走馬の養老・余生等に関する取り組みを行っている団体等に対する支援にも取り組んでいます。

課題はまだまだ数多くありますが、今後もさらに検討を重ね、より充実したものになるように取り組んでいきたいと考えております。このような取り組みによって、馬に携わる人や

馬を理解してくれる人々が増えれば、引退競走馬のセカンドキャリアが広がるとともに、最終的には馬産業全体の活性化につながるものと考えています。

引退後の競走馬の取扱いが大きく取り上げられ、社会問題に発展している国もあります。これは競馬を施行する世界各国に共通する問題であり、2017年には、その話し合いの場である「引退競走馬に関する国際フォーラム」が設立され日本も第1回から議論に参加しています。また、JRAはこのフォーラムのスポンサーの一つになってその活動に協力しています。

これまでの経験から明らかなように、競馬産業が繁栄するためには、競走馬が生産され、育成調教され、レースに出走し、選抜された馬が生産界に還るというサイクルが円滑に回ることが極めて重要です。そして、このサイクルを支える原動力は、勝馬投票券の売上げ、すなわち競馬に対するお客様の支持であり、社会からの理解が必要条件になります。そのためには、今後も馬の福祉に関する問題に対し真摯に取り組むことが重要と考えています。皆様方のご理解ご協力をよろしくお願いします。

アイルランドの生産育成の現状

⑧ アイルランドの馬事文化

日本中央競馬会 日高育成牧場 専門役

岩本 洋平

これまでの連載では、アイルランドの競馬産業についてご紹介してきました。アイルランドは人口1万人当たりのサラブレッド頭数が50頭であり、他の主要なサラブレッド生産国であるオーストラリア（28頭）やアメリカ（3頭）より多く、ヨーロッパにおいてもイギリス（5頭）やフランス（4頭）に比べて馬に遭遇する確率が高いと考えられ、馬の存在がより身近な国であると言えます。そのため、多くの人々が子供の頃から馬に親しみ、大人になっても馬と接する機会が多くあると考えられます。今回は、アイルランドの競馬産業を支える馬事文化についてご紹介していきたいと思います。

著名な競馬関係者を輩出する草競馬

サラブレッドだけでなく多くの馬が飼われているアイルランドでは、それらの馬を用いた様々なイベントが日常的に行われています。その中でも、ポニーと呼ばれるサラブレッドよりも体高の低い馬たちを用いた、ポニー・レーシング（写真1）と呼ばれる草競馬がアイルランドの各地で盛んに行われています。各地で開催されるポニー・レーシングは地元の馬イベントとしてアイルランドの人たちに娯楽を提供するのに役立つだけでなく、それ以上に将来の騎手や騎乗者の養成に多大な貢献をしています。アイルランドのポニー・レーシングには15歳以下の子供が騎手として参加可能で、馬の体高に応じた斤量を背負ってレースを行います。各地のポニー・レーシングの結果を総合してチャンピオンジョッキーを決めるほか、毎年8月にはポニー・レーシング最大のレースであるディングルダービーも開催されるなど、参加している子供たちは公式の競馬の騎手と同じような体験をすることができます。このようなポニー・レーシングを経験した現役騎手の中には、日本でも活躍して知名度の高いオイシン・マーフィー騎手やフランケルの主戦騎手であったトム・クウィリー騎手など多くの騎手が含まれます。

また、ポニー・レーシングに騎乗している子供たちは、その技術を活かして厩舎で現役の競走馬に騎乗することもあ

ります。アイルランドの多くの厩舎では、学校が長期休暇の時期になると多くの子供たちが現役の騎手や熟練の騎乗者と共に調教を行っている姿が日常的にみられます。これは単に子供たちに経験を積ませるという意味だけでなく、夏の休暇シーズンに多くの騎乗者が休暇を取って人手不足となる時期の貴重な労働力を確保するという意味もあります。このような仕組みが将来騎手や騎乗者として働きたい子供たちの騎乗技術を向上させることに役立っているだけでなく、競馬産業の人材確保の面でも大きな役割を果たしていると言えるでしょう。



写真1 ポニー・レーシングの様子

また、ポイント・トゥ・ポイントと呼ばれる、アイルランド各地で開催される障害競走の草競馬も開催されています（写真2）。各地方の馬イベントとしても人気を博しており、1回の開催で約1,000人の来場者が訪れ、年間では約10万人もの人々がポイント・トゥ・ポイントの観戦に訪れていると言われています。会場では、公式の競馬開催と同様にブックメーカーが馬券発売を行うなど、関係者以外も楽しめるイベントになっています（写真3）。2016年には70カ所の会場で合計98開催613競走のポイント・トゥ・ポイントが行われ、延べ5,438頭の馬が出走しています。ポイント・トゥ・ポイン

トの特徴として、出走する馬たちの中に後々ナショナルハント(NH)競走(障害競走)で活躍する馬たちが含まれていることが挙げられます。つまり、単に各地方の馬イベントとして開催されているだけでなく、優良なNH競走馬を選抜する役割も担っていることになります。イギリスとアイルランドの2015/16シーズンのNH競走において、1,127頭もの勝ち馬たちがポイント・トゥ・ポイントを経験しており、その中には66頭の重賞勝ち馬も含まれます。さらに、代表的なNH競走であるチェルトナム・ゴールドカップやグランドナショナルの勝ち馬も輩出しており、NH競走を開催する上で欠かせない馬事文化と言えるかもしれません。

さらに、優良馬の輩出だけではなく優秀な競馬業界人の輩出にも役立っており、著名な調教師やNH競走騎手の中にもポイント・トゥ・ポイントから競馬産業でのキャリアをスタートさせた人たちが多く含まれます。そのような人たちの中には、世界有数の調教師であるエイダン・オブライエン調教師や著名なNH競走騎手として活躍しブラックステアマウンテンで中山グランドジャンプを制したルビー・ウォルシュ元騎手が知られています。



写真2 ポイント・トゥ・ポイントの様子



写真3 草競馬会場のブックメーカー

多くの観客を集める馬術競技会

アイルランドでは馬術競技会も盛んに行われており、それぞれの競技会には多くの観客が詰めかけます。その中でも毎年8月上旬に5日間の日程で行われるダブリンホースショー(写真4)はアイルランド最大の馬術競技会であり、馬関係のメディアだけでなく一般のメディアでも取り上げられるほどアイルランド内では注目度の非常に高い競技会です。競技内容は障害飛越競技が主体で、初心者や子供を対象としたものからオリンピックに出場するような選手が参加するレベルのものまで、数多くの競技が行われます。その中でも、最終日に行われるロンジン社がスポンサーとなっているグランプリ競技は、その総賞金額が35万ユーロを誇り、同じ週にカラ競馬場で行われた2歳G1のフェニックスステークスの総賞金額の30万ユーロを上回っていました(2019年当時)。



写真4 ダブリンホースショーの様子

また、ダブリンホースショーは単にハイレベルの競技が開催されているだけでなく、多くの馬具や馬に関する商品の見本市としての役割もあります。会場には各種競技に使う馬場だけでなく、見本市の会場となる建物がいくつもあります。競技会を楽しむだけでなく、見本市で多種多様な馬具などを見るだけでも楽しむことができます(写真5)。さらに、子供を対象とした馬のショーもいくつか開催されており、大人から子供まですべての人が楽しめるイベントとなっています(写真6)。

総合馬術についても、日本で開催されないようなハイクラスの馬術競技会も開催されています。タタソールズ・インターナショナル・ホース・トライアルという競技会では、日本では通常は開催されないフォースターというクラスの競技が実



写真5 見本市の様子



写真6 馬のショーの様子

施されています。2019年に開催されたこの競技には、オリンピックを目指す選手も多く参加しており、東京オリンピック2020の代表である戸本一真選手も参加していました（写真7）。このようにアイルランドにおいては、日本ではなかなか見ることのできない世界レベルの馬術競技選手の競技をみ

ることもでき、世界レベルの馬術を身近に感じることができます。その結果、競馬産業にも馬術競技を経験した高い騎乗技術を持った人材が参入してくることもあります。アイルランドのトップトレーナーの一人であるジェシカ・ハリントン調教師は、オリンピックレベルの総合馬術選手として活躍した経歴があることが知られています。これらのことからアイルランドでは馬術競技大会も非常に重要なイベントとして位置づけられていることが窺われます。



写真7 フォースター競技に参加する戸本選手

終わりに

これまで8回にわたりアイルランドの生産育成の現状についてご紹介してきました。海外の競馬産業を見た経験は大きな刺激となったとともに、日本の競馬の素晴らしさを改めて感じる機会にもなりました。今回の連載によって海外競馬、特にアイルランドの競馬産業に興味を持ってくださる方がいていただければ幸いです。



BTC 調教場

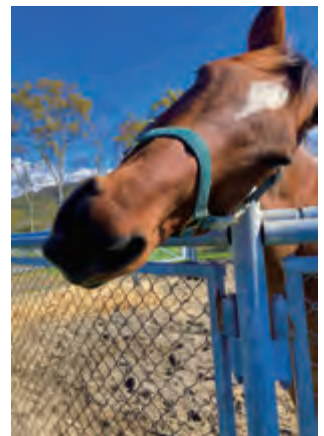
（浦河高校写真部 BTC フォトコンテスト用撮影）



加藤諒祐 「ゾロゾロ」



宮嶋凌生 「広～い」



辻悠太 「柵からこんにちは」

藤澤和雄アドバイザー（元JRA調教師）とBTC研修生による座談会

公益財団法人 軽種馬育成調教センター 業務部 教育課

楫川 徳都

2022年2月にJRA調教師を引退された藤澤アドバイザーに、同年10月27日（木）BTC第40期生向けのお話をいただきました。

藤澤アドバイザーは北海道苫小牧市の出身で、1988年に調教師を開業、引退されるまでにJRA GI34勝、重賞126勝、通算1570勝という歴代2位の記録を収められています。管理馬にはシンボリクリスエス号、ゼンノロブロイ号、レイデオロ号、グランアレグリア号など、数々の名馬を手がけ、現在はJRAアドバイザーとして競馬の発展に尽力されています。

今回の講演会は、藤澤アドバイザーご自身の経験（イギリスでの研修で学んだこと等）から、研修生の質問に答えていただく形で行いました。研修生からは、馬の取り扱いや、今まさに騎乗訓練で取り組んでいる内容など多くの質問があり、1つずつ分かりやすく丁寧に答えていただき、大変貴重な経験となりました。

今回は、藤澤アドバイザーとのQ&Aと、座談会後の研修生の感想から一部を抜粋してご紹介します。



常に笑顔を絶やさず講演される藤澤アドバイザー

Q. 馬のことを第一に考えるために一番大切にしていることは何でしょうか？

A. 時間をかけてゆっくり調教することをイギリスで学びました。どのような気性の馬でも焦ることなく自然に馬が良くなるまで、我慢して待つことが大切です。牝馬の調教にはこのイギリスで学んだことを特に意識して取り入れました。若い牝馬や競馬で好走した馬の場合は、機嫌を損

ねないように十分に配慮した調教が必要です。走ることを苦しく感じたり、一生懸命走っている馬に対してさらに求めすぎたりしないようにしていました。集団生活をする馬本来の習性を基にした集団調教や併走などを活用し、とにかく無理に走らせないように気を付けていました。



座談会の様子

Q. 人に対して従順でない馬に接するときにはどのように対応されてきましたか？

A. 従順でない馬のほとんどは、まず威嚇をして人が逃げるかどうかを試てきます。それに対して人が過剰に反応してしまうことから始まります。取り扱う際にはいきなり無口等を持っていくのではなく、声を掛けたり撫でたりしながら、場合によってはエサを使用して関係性を改善します。人が近く来ると良いことがあるというような関係を作るように心がけていました。早い動きや急いだ状況での取り扱いは馬に対して悪影響がでる場合が多いので特に気を付けていました。

Q. 自分たちがこれから競馬社会で生きていく上で何が大切ですか？

A. 研修で勉強したことも大切なのですが、馬を自分の子供に置き換えて考えることも大切です。例えばエサを食べない馬には小分けにして回数を多く与えてみたり、好きなものなら食べるのか確認するなどです。噛みついてくる馬には怒鳴りつけたり叩いたりするのではなく、なぜそうしたのかを考えて対応すると馬を大事にすることができると思います。



座談会前には研修の様子もご覧いただき、「皆元気が良く、楽しそうに研修をしていて、とてもいいですね」とお褒めの言葉をいただきました。

研修生の感想から

(高松さん) 多くの名馬達を育ててきた藤澤アドバイザーのお話を聞くことができ、とても貴重な経験になりました。調教師になるまでの過程や調教法、騎乗技術に関することなど様々なお話を伺いました。特に騎乗技術の話題では「重心を後ろにする」「馬とのコンタクトは強くとりすぎない」など、今の私に不足している部分に関する内容をお話していただき大変勉強になりました。



マイクを馬の頭部に例えて詳しくハミ受けを説明していただきました。

(上川さん) 座談会に参加して、馬は人と会話ができない分、見て聞いて色々なことを吸収し理解しようとしてくれているのかなと思う。だから人も馬に対してよく観察し、普段の手入れからスキンシップをはかることで、いつもの様子と違う部分に気付けるようにしたいと思いました。私たちはこれから若馬の調教をしていきます。私たちにも初めてのことがたくさんあるように、馬にとっても初めてのことがたくさんあるので、色々なことを経験させてあげて安心して安全な環境を提供できるようにしたいと思いました。馬はいつも何かしら応えてくれているので、私たちも馬へのリスペクトの気持ちをもって接していけたらと思います。

(小松崎さん) 藤澤アドバイザーの言葉には重みと同時に馬を大切にするという確固たる信念も感じました。「馬を調教する」という意識を持つことが重要。育成から競走馬へと成長を促し、そして競走馬としてのクオリティを上げること。牧場それぞれの特色、こだわり。自分の経験や考え。これらを集約して自身の責務を果たす。競走馬1頭の重みを改めて感じさせる時間となりました。

(山下さん) 藤澤アドバイザーの話を拝聴する機会に恵まれたことは欣喜の至りでした。話の中で藤澤アドバイザーの馬の主体性を重んじるという姿勢は、馬に対する向き合い方を象徴しているように感じられました。たとえデビューが遅れることになったとしても焦らず、馬が走りたと思うまで待つことが肝要だと仰っていました。これから私は馬と向き合うことになりますが、相手が物言わぬだけに何がしたいのかというわずかなサインを見落とさず主体性をもってくみ取れるようになりたいとそう思いました。

最後に

座談会の前に、研修生の騎乗訓練もご覧頂いた事もあり、研修生が馬と真剣に向き合って騎乗技術向上に努めている様子や馬と会話する様子について、座談会の最初に褒めて頂きました。その後、特に馬の取り扱いについての内容、例えば馬と会話して、仕草等の変化を毎日観察する重要性や、上手い出来ないことを同じ方法で続けるのではなく、もっといい方法を探すべきといった考え方の変換については、その日から研修生がすぐに取り入れることが可能であり、また就職してから大きく役立てられる内容でした。「基本が大切」「命を扱う」といったホースマンとして大切な精神を改めて学ぶ事が出来た良い機会となりました。

改めてこの場を借り、藤澤アドバイザーにお礼申し上げますとともに、このような場を設けて頂いた関係者の皆様に感謝いたします。



藤澤アドバイザーと第40期生の記念撮影

東京2020オリンピック・パラリンピック馬術競技会場における馬ピロプラズマ症の発生について

日本中央競馬会 競走馬総合研究所 企画調整室長

山中 隆史

はじめに

東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会（以下、東京2020）は、2013年9月に開催が決定されました。当初は、江東区（夢の島）が馬術競技の予定会場とされていましたが、2015年2月に、東京都世田谷区にある日本中央競馬会（以下、JRA）馬事公苑（馬場と障害の競技会場およびすべての参加馬の本拠地として）および江東区にある海の森公園（総合のクロスカントリーコースとして）に変更されました。このことを受け、2017年1月よりJRA馬事公苑は、全面的に新しく整備する工事が行われました。



図1 馬事公苑の全景（2020年6月撮影）

また、2018年12月には、東京2020大会組織委員会とJRAとの間で、オフィシャル・コントリビューター契約が締結されたことにより、JRAからは会場だけでなく、人的にも支援す



図2 障害馬術競技の様子（COVID19のため、残念ながら無観客となった）

ることとなり、大会期間中（近代五種を含む）、獣医、装蹄および施設などに関する専門職員および事務職員等の合計134名が派遣されました。筆者は、オリンピックに参加する馬が最初に到着した2021年7月13日以降、同年9月2日にパラリンピックのすべての参加馬が帰国するまで、JRA馬事公苑内に滞在し、バイオセキュリティ・マネージャーとして馬の防疫・検疫を担当する機会をいただきました。本稿は、その際に偶然にも遭遇した馬ピロプラズマ症の急性症例との遭遇を中心に、その経験を振り返ったものです。

参加馬の移動手順

競馬においては、1981年の第1回以降、40年以上もの間、毎年11月下旬に東京競馬場でジャパンカップが開催されてきました。しかし、ここ数年は、5頭に満たない少数の外国馬の参戦にとどまっており、また、それら外国馬の出発（所属）国も欧州、北米および一部のアジア地域に限られています。この場合、出発前に隔離を伴う（輸出）検疫は受けませんが、成田空港到着後、千葉県白井市のJRA競馬学校内にある輸入検疫施設で5日間の輸入検疫を受けてから、東京競馬場に移動し出走しています（2022年からは東京競馬場内の施設で、輸入検疫を受けます）。

一方、東京2020においては、ほぼ全世界から合計300頭を超える参加馬が馬事公苑に集まるという点で、ジャパンカップとは大きく異なります。東京2020では、日本への出発前に7日間の輸出検疫を受けてから、羽田空港を経てJRA馬事公苑へ到着することとなりました（馬の輸送に羽田空港が使用されたのは、1964年の東京オリンピックと、今回の東京2020の2回のみだそうです）。当初は、日本国内からの参加馬が見込まれており、それらには日本国内の他所で、海外からの参加馬と同様に7日間の隔離検疫を受けてから会場入りをする手順が考えられていました。しかし、その後、すべてキャンセルされました（日本チームの馬は、すべて海外からの来日となりました）。

手短かにまとめますと、一定の隔離を伴う検疫は、国際競走や国際競技では共に必要ですが、その時期は日本到着後か日本への出発前かで異なるといえます。特に、後者の国際競技用のしくみは、2015年に国際獣疫事務局によりコード

化（防疫上で守られるべき世界標準）された高度衛生／能力馬（High health/performance horse）という概念に沿ったもので、いったんホーム国を出発する前に隔離を伴う公的な検疫を受けたのちは、最大90日間、公的監視下にある大会会場（これらの中には、馬無病地帯（Equine Disease Free Zone）であると政府機関によって宣言される場合もあります。しばしば、バブルとも比喻されます）にのみ滞在する限り、国境を跨いでも移動後の隔離を伴う検疫が免除されるというものです（いわゆるバブル to バブル）。東京2020に先立ち、農林水産省は大会会場をEDFZであると、国際獣疫事務局を通じて国際的に宣言しました。

以上の手順以外に、前述したジャパンカップなどの国際競走への参加外国馬や、その他の一般馬（繁殖用や肥育用など）の来日と異なる点として、事前の通告を条件に、馬ピロプラズマ症（以下、EP）抗体陽性馬の来日が許容されたことが挙げられます。このことについては、後述します。

馬ピロプラズマ症（EP）と、その抗体陽性馬の受入れ準備

EPとはバベシア カバリあるいはタイレリア エクイと呼ばれる原虫の感染により引き起こされる馬属動物の疾病の総称です。これらの原虫は、ユーラシア、中南米およびアフリカ大陸に広く分布し、現在でも馬での発生がしばしば報告されています。一方、北米大陸では、散発するのみにとどまっています。日本では、過去に動物検疫所内において輸入馬での摘発がありましたが、野外での発生報告はありません。これら原虫は様々な種類のダニ（カクマダニ類、イボマダニ類やコイタマダニ類など）の体内で増殖可能であり、それらの吸血により馬が感染します。感染した場合の馬の致死率には幅があり、10-50%とされていますが、これはおそらく、周辺の衛生環境や獣医診療へのアクセスの容易さに依存していると思われます。馬を国際間で移動させる際、とくに重要な点は、EPに感染したものの生き延びた馬の体内で、それら原虫が長期間保持されてしまうことです。もし、それらの馬体内で潜伏中の原虫がなんらかのきっかけ（ストレス等）で再活性化し、かつ偶然にダニに咬まれた場合、咬んだダニが次に他の馬を咬む際に、原虫を他馬に伝播させてしまう可能性があります。このことが、馬を他国から輸入する際に、侵入阻止のために、EP抗体検査の陰性結果が重要視される理由です。上述のとおり、ユーラシア大陸では風土病的にEPが存在し、かつその一地域である欧州では馬術が盛んなことから、ユーラシア大陸以外の北米や豪州などの地域で国際的な馬術大会（例：1996年のアトランタオリンピックや2000年のシドニーオリンピックなど）を開催する場合、EP抗体陽性馬をいかに管理しながら受け入れるのがバイオセキュリティ上の大きな課題となってきました。そして、今回の東京2020も例外ではありませんでした。そこで、以下に東京2020で採られた措置の例に

ついて示します。

1. 会場内に囲障（高さ2m以上）を設置して、野生動物（特に犬）の侵入を防止
2. 事前の会場内におけるダニの生息調査および駆除剤の散布
3. （ダニのすみかになりやすい）芝の刈込み
4. 参加馬の会場到着時および滞在中（1日2回）を通じて、体表（耳の付け根、鼻面、繋、脇、内股および肛門周囲など）におけるダニの付着の有無および体温の測定・観察およびそれら記録の義務化（結果的に、東京2020を通じて、ダニの付着を認める馬は皆無でした）
5. EP抗体陽性馬の馬房と、清浄国由来馬の馬房との間に、最低1馬房分の空き（敷料を使用しなければ馬具庫でも可）を設ける（実際には別棟となりました）

2.において示した生息調査は5年間にわたり、農林水産省により実施されました。その結果、EPを媒介する種類のダニは1匹も見つかりませんでしたが、さらに念のため、生息調査後には、その都度、ダニ駆除剤の散布が行われました。また、とくにコイタマダニ類は犬への嗜好性が高いことから、生息調査に先立って、野生の犬が迷いこまないよう1.に示すような囲障の設置が必要で、これは大会終了後まで維持する必要がありますがありました。基本的に、新鮮な血液がないとダニは数ヶ月で餓死しますので、1.の措置は大変、重要かつ有効な手段となります。大会会場であるJRA馬事公苑が住宅地に囲まれていることや（図1）、海の森公園が東京湾に浮かぶ人工島であることは、野生動物の侵入を防ぐうえで、地理的に有利な点であったと思われます。もちろん、ペット犬の持ち込みも禁止されましたが、盲導犬や爆発物探知犬などの特殊なケースについては、事前の申請と観察により認められました。

馬ピロプラズマ症の急性症例との遭遇

2021年7月21日に欧州から到着したある五輪参加予定の馬が、7月25日朝に突然、発熱（39.5℃）、貧血（菌莖などの可視粘膜の蒼白、ヘマトクリット値：16%）および深い努力性呼吸を示しました。この時点で、とくに感染症の可能性を強く疑ったわけではありませんが、バイオセキュリティ・マネージャーとしましては、発熱と貧血が典型的な症状として知られる馬伝染性貧血（のちにゲル内沈降反応にて陰性を確認）と、馬ピロプラズマ症の可能性を除外しておかなければならないと考えました。じつは、EP抗体陽性の馬を受入れるにあたり、マラリア原虫の検出用に開発された診断装置を（XN-31、Sysmex社、神戸）、JRA競走馬総合研究所（以下、総研）がSysmex社と共同でEP原虫を検出できるように改良し、あらかじめ会場内の獣医診療所検査室に搬入していました。

そして、同装置を用いて迅速に（約1分/検体で結果が得られる）、タイレリア エクイに感染していると考えられる赤

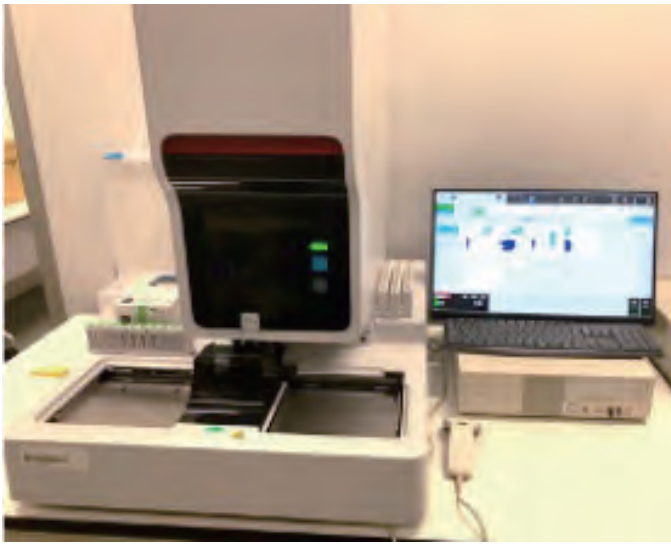


図3 馬事公苑内の獣医診療所に設置した XN-31

血球が検出されました。その時点で、我々は相当の「手ごたえ」を感じておりましたが、EP は日本の家畜伝染病予防法で定められている家畜伝染病であるだけでなく、国際獣疫事務局によりリスト化されている重要な疾病でもありますので、念のため、農林水産省および栃木県の動物衛生当局との協議の上、東京2020大会組織委員会の公用車を使用して、栃木県下野市にあるJRA総研へ血液サンプルを運び込み、従来法である血液塗抹標本の顕微鏡観察およびPCR 法による確認検査を実施しました。その結果、同日夕方にタイレリア エクイ陽性であることが最終的に確認されました。その後、同馬は速やかに隔離厩舎へ移動され、輸血（JRA総研に繋養されているユニバーサル・ドナー由来全血の投与）やイミドカルブ（寄生虫駆除剤）の投与などの治療を受けました。当該馬は、残念ながら競技にこそ参加することはできませんでしたが、貧血は劇的に改善し8月5日に無事に帰国の途に就くことができました。なお、同馬には、日本へ出発する前の6月28日に、EP 抗体陰性の証明書が発行されていました（日本向け30日以内の検査が義務付けられていた）。

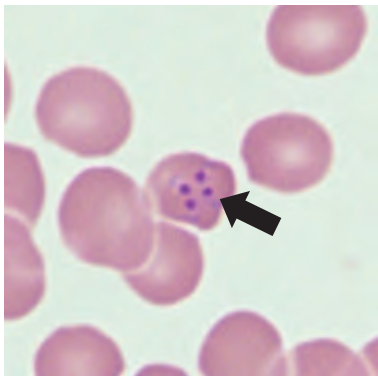


図4 症例馬の血液塗抹標本の顕微鏡写真（ライト・ギムザ染色。矢印：タイレリア エクイに感染した赤血球に特徴的な、マルタ十字様に位置する洋梨状のメロゾイトが観察される）

まとめ

振り返りますと、今回の出発前の EP 抗体陰性であった馬

の急性症例との遭遇は、ともすれば、持続感染する病原体に対する抗体陽性馬のみに目が行きがちな我々に、抗体の有無だけが、当該病原体の持込リスクの有無を決定するわけではないという警告を改めて与えてくれました。このような類似疾病としては、馬伝染性貧血や馬ウイルス性動脈炎（未去勢の牡の場合）があげられると思います。いずれの場合も、抗体陽性であれば、病原体が体内で保持されている可能性が示唆されますが、逆に、抗体陰性であっても、体内における病原体の保持（感染していること）が否定されているわけではありません。今回のように、（おそらく）初めて感染し、まだ抗体が産生されていない段階「潜伏期（本疾病では約2-3週間）あるいは急性期」にあるかもしれないからです。

また、現場（大会会場内）で簡便かつ迅速に実施可能な診断法の開発の重要性も感じさせられました。上述した通り、今回我々は実験的ではありましたが、XN-31を現場に導入していたおかげで、早い段階で、いわゆる「あたり」をつけることができました。このことは、血液サンプルがJRA総研に到着するまでの間に、検査担当者（越智章仁 博士）があらかじめ準備を整えておくことを可能にし、時間の節約に役立ちました。また、迅速な診断の確定は、国や自治体の衛生当局、当該チーム（選手や監督など）、大会組織委員会ならびに国際馬術連盟などの様々な利害関係者との間における情報共有および連携を円滑なものにし、当該馬の迅速な隔離や治療の開始を可能にしてくれました。これら一連の対応は、国際馬術連盟の獣医事の責任者をはじめとする様々な関係者に、驚きをもって称賛されました。会場内では当然、各国チームやメディアの目がありますから、隔離厩舎へ当該馬を秘密裡に移動させることは、ほぼ不可能です。今回の東京2020のような、世界中の多数の人馬が一堂に会するイベントにおいては、迅速に、かつ高い透明性をもって情報を共有するという姿勢が、すべての利害関係者からのバイオセキュリティに対する理解・協力を得るための鍵であると思います。仮に、このことを無くして、隔離厩舎に馬を搬入すると、さまざまな人たちの心に疑心暗鬼を生ませかねません、とはいえ、いつまでも隔離や治療の開始を遅らせるわけにもいきません。

東京2020をきっかけとして、今後、日本への国際的な馬術大会の誘致が活発になるであろうと思われます。例えば、2026年には愛知県と名古屋市がホストとして、第20回アジア大会が開催される予定と聞いています。今後ともJRA総研は、世界中のさまざまな馬伝染病の最新情報を収集するとともに、現場での活用資するそれら診断法の研究・開発に、鋭意努めてまいりたいと考えています。

最後になりましたが、東京2020において多大なるご指導・ご協力を賜りました農林水産省 動物衛生課ならびに動物検疫所、東京都家畜保健衛生所、東京2020大会組織委員会およびJRAの同僚各位に、深謝の意を表します。

育成馬にみられる骨折①

公益財団法人 軽種馬育成調教センター

日高 修平

はじめに

四肢の骨折は、競走馬において代表的な運動器疾患の一つで、レース出走を目標にトレーニングを行っている育成馬も例外ではありません。育成馬の骨折は、競走馬と同様に後肢よりも前肢で多く発症します（比率3：1、2019～2021年BTCにおける育成馬の骨折発生数調べ）。その原因として、馬の体重は後肢に比べ前肢に多くかかっていること、後肢が推進力に大きく使われるのに対して前肢は方向変換に重要な働きをしていること、前肢は頭頸部の上げ下げや後肢からの力を受け止めるなどの動作によって複雑でより大きな力が加わることが挙げられています。BTCにおける近年の骨折発生の内訳をみると、前肢では腕節構成骨および中手骨（管骨あるいは副管骨）、後肢では第一趾骨（繋骨）で多く認められました（図1）。

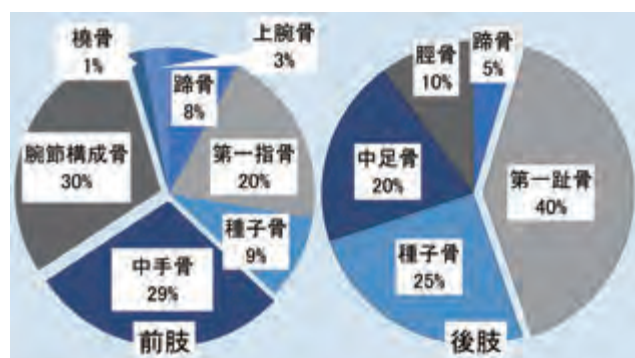


図1 BTCにおける育成馬の骨折発生の内訳（2019～2021年）

育成期において骨折を発症した馬は半数以上が治療によりその後レース出走を果たすことができますが、管理が困難で症状が悪化する、あるいは良化せず諦められてしまうことも決して少なくはありません。迅速かつ適切な診断と治療、そして管理法は競走馬としての予後に大きくかわるため非常に重要です。

本稿では、X線検査で骨折を診断する際の留意点、実際に骨折した馬を管理する上での注意点、そして育成馬にみられる様々な骨折についてご説明いたします。

X線検査で骨折を診断する際の留意点

①標準の撮影角度から少しずつずらして撮影

骨折の画像診断は、一次診療において主にX線検査により行われています。X線検査では、ほとんどの部位において標準的な撮影法として真横、正面および斜め2方向の計4方向で撮影が行われます。しかし、そのような標準的な撮影法のみでは骨折線が描出できない場合は、標準的な角度から少しずつ角度をずらして撮影することが必要になります。図2の症例は第三足根骨の盤状骨折で角度を少しずつずらして撮影することで鮮明な骨折線が得られました。

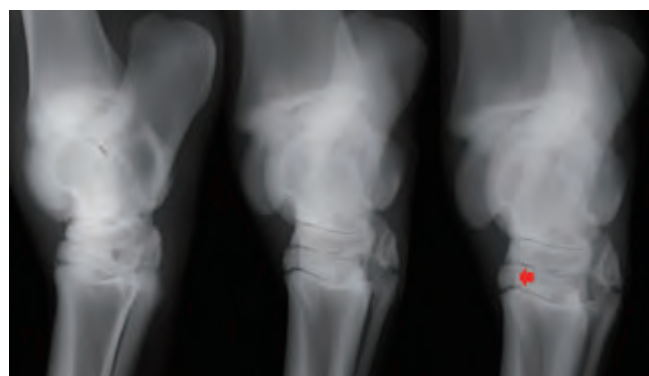


図2 第三足根骨の盤状骨折

真横から少しずつ角度をずらして撮影。矢印は骨折線を示します。

②軟部組織にも注目

X線検査というと骨ばかりに注目しがちですが、軟部組織を評価する上でも有用です。図3の症例は跛行を呈し、手根中央関節に腫脹を認めましたが、触診痛は不明瞭でした。前述した標準的な撮影法でははっきりとした骨の異常はみられませんでした。手根中央関節の腫脹が画像上で確認できたため、少しずつ角度をずらして再撮影しました。すると第三手根骨に骨折線と思われる陰影をみつけることができ、スカイビュー像（肢を持ち上げて屈曲させた状態から撮り下ろす）でも描出することができました。腕節背側（前面）の関節の腫脹は慣れていれば容易に触診で判断可能ですが、画像上で確認することができればより確実な診断に

つながります。X線検査を読影する際は軟部組織にも注目しましょう。



図3 第三手根骨の骨折

矢印は手根中央関節の腫脹、赤丸内に骨折箇所を示します。

③発症直後の検査結果だけでは骨折の有無は判断できない

骨折発症直後にX線検査で骨折線が検出できず、時間の経過に伴い明らかになることがあります。また、骨折線ではなく仮骨（骨折が生じた場合に骨再生への橋渡しとして生じる不完全な骨組織）の形成により骨折が示唆される場合もありますので、そのことにも注目しましょう。成書では「発症してから7～10日後の再検査で骨折線や仮骨の形成が確認できるようになる」とされていますが、図4の症例では1週間後の再検査でも骨折線が検出できず、2週間後に確認できました。また、同様の骨折で1ヵ月後に骨折線が確認できた症例も経験しています。以上のことから、骨折を疑う症例は発症直後の検査結果だけで骨折の有無を判断しないことが重要です。

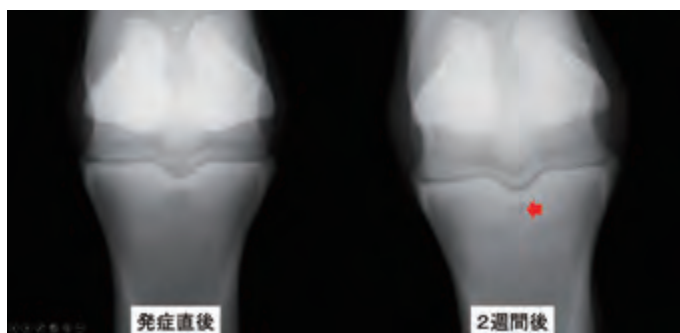


図4 第一指骨の骨折

発症直後（左写真）では骨折線が検出できず、2週間後に骨折線（右写真の矢印）を確認できました。

骨折した馬を管理する上での注意点

疼痛管理と馬房内での寝起き防止策

骨折の種類によっては馬房内での動きだけでも悪化し、致命的な状況へと至るものがあります。図5の症例はトレーニング中に第三中足骨内側顆の骨折を発症し、骨折線が近位（上）方向へ伸びているのが確認されました。重度の跛行を示していましたが、発症した翌日にプレートで固定され、術後に鎮痛剤を投与したことにより疼痛も減少し、馬房内

でもよく動くようになりました。順調かと思われたのですが、9日後に症状が一気に悪化し、その肢を着けられなくなってしまいました。X線検査を行ったところ、手術翌日にはみられなかった横方向への骨折がみられました。本症例は術後舎飼にしていたので、馬房内での動きのみで骨折が悪化したということになります。特にリスクが高いとされているのは寝起きですが、痛みが軽減したことによりよく動くようになったことも影響していたと思われます。このように四肢の骨折はプレート固定やキャスト固定を施していたとしても馬房内での動きで悪化してしまう恐れがあることを重々承知しておかねばなりません。また、鎮痛剤の投与もこのような事態を引き起こす可能性があるがあるので、投与する際は馬の状態をみながら検討しましょう。

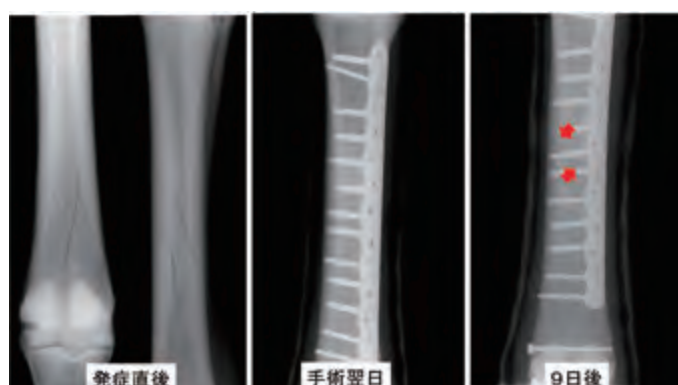


図5 第三中足骨内側顆の骨折

術後、舎飼にしていたにもかかわらず、症状が悪化し、新たな骨折線がみられるようになりました（右写真の矢印）。

では寝かせないようにするにはどうすればよいか、その一つの方法として馬房の高い所にロープを張り、カラビナなどを使用して頭絡の鼻革と繋ぐ方法があります（図6）。天井側と頭絡を結ぶロープが長すぎると寝てしまうので、牧草ネットから牧草を食べられたり、水桶から水を飲む程度の高さにします。こうすることにより馬は馬房の中である程度動くことが可能となりながらも、寝ることはできなくなります。事故が起きないのか？と心配する声もありますが、今のところ経験していません。



図6 馬を寝かせない方法

次回は、育成馬にみられる様々な骨折をご紹介します。

ウマの腸内細菌について

日本中央競馬会 日高育成牧場 上席調査役（研究担当）

松井 朗

はじめに

かつて、ヒトの臨床医学において大腸は、大便の製造が主体となる器官であって、生命活動において重要であるという認識はほとんどありませんでした。しかし、近年、大腸は全身の臓器とつながっており、相互作用によってそれぞれの働きを調整することや、免疫細胞が多く存在し、病原菌やウイルスなどの有害物質に対して侵入を阻む門番の役割をするなど生命にとって要となる器官であることが認識されるようになってきました。また、大腸の健康にとって大腸内に棲む腸内細菌が不可欠であり、腸内細菌は健康にとって非常に重要な役割があることも認識されるようになってきました。このことから、ヒトの健康分野では腸内細菌の研究が盛んに行われ、ヒトの腸内細菌に関連した多くの食品やサプリメントが市場を賑わせています。ヒト同様、ウマ用にプロバイオティクスのサプリメントや、腸内細菌の増殖に有用であるとされる栄養素を含む補助飼料が多く市販されています。これらは、有用な腸内細菌が増殖することや、腸内細菌のバランスを良くすることを目指すためのものです。その一方で、ウマの腸内細菌の研究はまだ始まったばかりであり、まだまだ解明すべきことが山積みようです。

腸内細菌と揮発性脂肪酸（VFA）

草食動物であるウマにとって腸内細菌は、植物から栄養を取り出す役割があることから、ヒト以上に重要であることは間違いありません。全ての動物に共通ですが、食物繊維は消化器官において分泌される酵素によって分解することができないため、そのままでは栄養として消化管から吸収し利用することができません。ウマの場合、盲腸および結腸内の腸内細菌が、食物繊維を分解発酵することで揮発性脂肪酸（VFA）が生成され、そのVFAを生体内でエネルギーとして利用することができます。ヒトの腸内にも食物繊維を分解発酵する腸内細菌は存在しますが、ウマに比べて

その数は極めて少ないことから、基本的にヒトでは食物繊維を栄養として利用できないとされています。VFAは炭素鎖が短い脂肪酸の総称で、酢酸、酪酸およびプロピオン酸が含まれます。ヒトの食品にVFAはほとんど含まれておらず、腸内細菌によって生成されるVFAは非常に重要な栄養素と考えられています。なぜなら、VFAが腸管粘膜の修復や腸の蠕動運動を促すなど、大腸内の環境を整えるのに重要であることが知られているからです。ウマの場合も、大腸の健康維持にVFAは重要ですが、そもそもエネルギー源として大量のVFAが生成されるため、ヒトに比べて希少な栄養素ではありません。

腸内細菌の多様性

ヒトでは腸内細菌は、腸内環境を整えると同時に、免疫システムとして働くことや、腸の蠕動運動を調整するなど健康にとって重要な役割があります。ウマにとっても、腸内細菌は植物から栄養を得るためだけでなく、全身の健康維持にとって重要であると考えられます。ウマの大腸は長く、複雑に入り組んで腹腔内に収まっていることもあり、様々な障害を発症しやすい臓器でもあります。その点からも、大腸の健康維持に関する腸内細菌の役割は大きいと考えられます。

腸内細菌は機能的に、善玉菌、悪玉菌および日和見菌に分けられ、ヒトでは善玉菌：悪玉菌：日和見菌＝2：1：7の存在比が、腸の健康にとって理想であるとされています。ちなみに、日和見菌は善玉菌もしくは悪玉菌の数が優勢な方に味方して、機能するとされています。通常、善玉菌が10で悪玉菌が0であることの方が、腸の健康にとって好ましいように感じられるかもしれませんが、しかし、その細菌が“善”か“悪”かは、宿主側の利益で分類されているものであり、腸内細菌が腸内で有益な働きをするには、様々な種類の細菌が共生すること（多様性）が重要であるとされています。ウマでも同様に、腸内細菌が多様であることが好ましいとされており、下痢を発症している馬は、健康な馬に比べて常

駐する腸内細菌の種類が少なかったことが報告されています。

ウマにおいて常駐していることが確認された腸内細菌のうち、多くはどのような役割があるのか不明です。ウマでは、植物繊維を分解するラクノスピラ科 (Lachnospiraceae) やルミノコッカス科 (Ruminococcaceae) は善玉菌、乳酸を大量に生産するストレプトコッカス属 (Streptococcus) やラクトバシラス属 (Lactobacillus) は悪玉菌に分類され则认为されています (表)。ちなみに、“科”や“属”は細菌界の階級 ([門 (もん)] [綱 (こう)] [目 (もく)] [科 (か)] [属 (ぞく)] [種 (しゅ)] の順) を表しており、例えばヒトは、動物界では脊椎動物門-哺乳類綱-サル目-ヒト科-ヒト属となるようです。

学名	役割
ラクノスピラ科 <i>Lachnospiraceae</i>	細胞壁の分解と発酵
ルミノコッカス属 <i>Ruminococcus</i>	細胞壁の分解を助ける
ストレプトコッカス属 <i>Streptococcus</i>	デンプンの利用を助ける
ラクトバシラス属 <i>Lactobacillus</i>	アミノ酸や乳酸の生成
フィロバクテリウム属 <i>Fibrobacter</i>	細胞壁、糖、デンプンの分解を助ける
アシダミノコッカス属 <i>Acidaminococcus</i>	繊維の発酵

表 ウマの腸内細菌 (比較的数が多く、役割が判明しているものを抜粋)

先にも述べたように、健康にとって腸内細菌の多様性が重要であることから、悪玉菌を駆逐するのではなく、一定数を確保する必要があると考えられます。今後、ウマの腸内細菌の研究分野において、それぞれの腸内細菌がどのような役割があり、相互作用からどのようなバランスで存在することが望ましいのかが解明されていけば、腸内細菌用のサプリメントや補助飼料はさらに進展していくことが期待できます。

腸内細菌はウマの情緒に影響を及ぼす？

皆様の中にも、試験や面接に挑む際に緊張して、お腹が痛くなり便意を催した経験をされた方がいらっしゃるかもしれません。また、馬を初めての場所に連れていったときや、馬運車に乗せようとすると排糞する光景はよく見られます。腸は「第二の脳」とも呼ばれており、脳の次に多くの神経細胞が集まっている器官です。脳と腸は一見すると独立した器官ですが、実は密接なつながりがあり、神経系などを介し

てシグナルを交換し合っている関係であることが知られています。これは脳腸相関 (もしくは腸脳相関) (図) と呼ばれており、緊張する場面において便意を催す理由は、脳内での変化を腸の神経が受信し、腸の蠕動運動が活発になるためです。さらに興味深いことに、感情が腸に影響を及ぼすだけでなく、腸の状態が脳に伝わり感情に影響を及ぼすということが知られるようになっていきます。この脳腸相関にも腸内細菌は大きく関わっており、腸内細菌が腸の神経を刺激することや、腸内細菌が腸内で分泌されるホルモンの生成を促進することで、脳にシグナルを伝えているとされています。



図 「脳腸相関」のイメージ
脳と腸には密接なつながりがあり、神経系などを介してシグナルを交換し合う

ウマに濃厚飼料を多給すると、ウマが“うるさくなる”というのは飼養管理の現場でよく耳にする話ですが、多くの研究で、濃厚飼料の多給によりウマの行動が過敏になることが報告されています。しかし、濃厚飼料がウマの情緒に影響を与える理由についてはよく分かっておらず、“血糖値の上昇と関係するのでは？”、“ホルモンの分泌が影響するのでは？”など様々な憶測がされてきました。濃厚飼料に含まれるデンプンの多くは、小腸内において酵素により分解吸収されますが、一部は小腸での吸収を逃れて大腸に流入し、乳酸菌を生成する腸内細菌により分解発酵されます。その際に乳酸が生成されますが、デンプンの大腸への流入量が多いと、大腸内の pH は著しく低下し、食物繊維を分解発酵する細菌の数が減少し、逆に乳酸生成の細菌が増えるなど腸内細菌の内容が著しく変化します。最近の研究では、濃厚飼料の多給に伴う腸内細菌の変動が、腸から脳へのシグナルに影響し、そのことがウマを情緒的に過敏にさせるのではないかと考察されます。このことが証明されるためには、まだまだ研究が必要ですが、もし真実であれば、腸の健康はウマの体だけではなく精神の健康にも重要ということになるでしょう。

一人前のホースマンになるために

齊藤 能史

BTCに入講し約半年が過ぎました。全く“馬”というものに触れてこなかった私が一年間本気で馬と触れ合い、馬からたくさんの事を教えてもらったらどれほどのホースマンになれるのだろう、と考えながら入講した4月。それからというものの、楽しい事が多く、あまり不安はない中で過ごせていると感じています。

実際に研修が始まり、すぐに騎乗とはなりませんでした。馬の世界は三乗七厩と言われており、七割は馬に関する身の回りの作業をする世界です。しかし、慣れない作業を行っている、地上での動きは騎乗に繋がっているなあと日々感じられるようになりました。

騎乗訓練が始まってすぐに、調馬索での速歩やリズムを取るのが非常に難しく感じました。「軽速歩とは何ですか?」「これより速い動きがあるのですか?」と不安を感じながら難しい事にチャレンジする毎日ですが、その探求が何より楽しく、下手でもすごく実りのある日々でした。しかしこのままの成長スピードだと経験者に追いつけないと気づき始めました。騎乗していない時間は教官の体の使い方や、経験者の騎乗フォームをよく観察し、自分にインプットする作業に多くを費やし、無駄な時間をつくらないようにしました。少しずつですが、経験者と同じグループに入れる機会が増えていった事を嬉しく思いながらも、同時に難しい馬に挑戦させて頂く機会も増えていき、一喜一憂する日々が続いた事は今も鮮明に憶えています。その度に教官から多くの事を教えて頂き、大きく前に進む事ができました。気がつけばBTCの大人しい乗馬なら乗れるようになっていく自分に自信を持つことができ、更に上手になりたいという気持ちが大きくなりました。一つ一つの成長は小さくても、一日一日を積み上げたらとても大きなものになって自分に返ってくると実感しています。今



角馬場での騎乗訓練の様子（手前が筆者）

までの短い人生ではありますが、かけがえのない体験です。

ひとまず区切りの半年が終わり、上半期ではうまくいきすぎるくらいのもので得る事ができました。残り半年、次のステップは牧場へ就職した時の即戦力になるという事です。毎日の課題を自分で見つけクリアしていく。自分を見失いそうになったら心強い教官方に支えて頂き、BTCを卒業する頃には立派なホースマンになれる様、日々全力で楽しみながら過ごしていきたいと思います。



広大なBTC調教場 グラス坂路馬場での騎乗訓練

私を支える寮生活

清水 芽生

私がBTC研修に入講して半年が経過しました。思い返すと当初は同い年の人がおらず、幅広い年代の人たちとうまくやっていけるかすごく不安でした。私は人見知りで自分から会話に混ざるのは苦手でしたが、皆と共に寮生活を送る中で、食堂や談話室で揃ってTVを見たり、お菓子を食べながら話したりする事が増え、今では寮生活が私を支える大事な時間となっています。

研修が終わり、夕食を食べると自主トレーニングに励んでいます。1日の疲れで億劫な時もありますが、少しでも自分を高めたいと思い、毎日シミュレーター（電動木馬）室にこもりトレーニングに取り組んでいます。自分に厳しくできるか、寮生活では意識しやすく自分を高めるのに適した環境だと思っています。

研修の内容はかなりハードで体力的・精神的にも堪える事があるので、オフの時間があるからこそ毎日の研修に一生懸命取り組めるのだと思います。特に平日、食堂の方々が作ってくださる食事が毎日の楽しみであり、ボリュームと栄養満点で身体づくりに欠かせないものです。土日には自炊をして、みんなでパンケーキや焼き肉を食べたりして楽しい時間

を過ごしています。このような経験は、牧場で就労した後にも非常に重要ではないかと感じており、自身が社会に出ても通用する人間性を同時に養う事ができる貴重な機会であると感しながら日々を過ごしています。

今後も仲間と寮での時間を有意義に使い、残りの半年も自分を高める事ができるように頑張りたいと思います。



BTC施設内での研修に励む筆者（右）



トレーニング室でシミュレーターを活用する研修生

専門的な知識と技術を得る 課外活動・学科

山田 彩乃

私たち40期生が入講してから半年が経とうとしています。馬房清掃や馬の手入れなどの厩舎作業に騎乗訓練と忙しくも充実した日々を送っているのも、半年という期間はあっという間に感じられます。1年間という短い期間で、就労先の即戦力となれるよう、どれだけ騎乗技術や馬の取扱い技術を向上させ、厩舎作業を効率よく丁寧に行えるようになるかを日々考えながら実践しています。また、日々の厩舎作業や騎乗訓練に加え、学科や課外活動によってより専門的な知識を身につけて体現し、ここでしか得られない貴重な経験によって自身のキャパシティ向上に努めています。

学科では、獣医師や装蹄師の方々の講義が特に印象に残っています。馬の病気の兆候や症状、対処法などの正しい知識があれば馬に異変があった時にすぐに気付き、病気を未然に防ぐ事で、早めに対処することができるので馬を取扱う上でとても役に立っています。また自分では対処が出来ないことや判断がつかない場合も多いので、必ず教官に相談し指示を仰ぐようにし、社会人として重要な報告・連絡・相談も併せて実践しています。そうする事で、間違った処置や見逃してしまった症状によって悪化させてしまう事を防ぎ、知識や経験だけに留まらない対応力といった部分にも繋がってきているのではないかと感じています。

課外研修では、普段は経験できない貴重な経験を積む事ができています。9月中旬からはJRA日高育成牧場での馴致実習が始まりました。馴致を始めた1歳馬が、騎乗に向けて1つ1つ課題をクリアしていく姿に、感激や怖さといった様々な感情を体感することができた毎日でした。馬の様子を常に確認し、安心感を与えて慣れさせる事、人馬両方の危機管理をする事がより求められます。馴致は難しく危険な作業となりますが、馬が新しい事を受け入れて馴致が進んでいくと成長を感じて嬉しくなります。馬が競走馬になるための重要な作業なので、出来るだけ多くの事を吸収していきたいです。

残りの下半期では、就職活動も含め卒業後どのような人材になりたいかを考えながら、様々な課題に前向きに取り組んでいきたいと思っています。



課外研修の一環でアポイ岳を訪れた研修生（左から2番目が筆者）



JRA日高育成牧場にて1歳馬の馴致実習

★ BTC 調教場利用 JRA 重賞競走 優勝馬一覧 (2022 年 9 月～ 11 月分) 関係者の皆様、おめでとうございます。

- | | |
|---|---|
| ・ドゥーラ 牝 2 歳 札幌 2 歳 S G III (2022/9/3・札幌) | ・サンライズホープ 牡 5 歳 みやこ S G III (2022/11/06・阪神) |
| ・カラテ 牡 6 歳 新潟記念 G III (2022/9/4・新潟) | ・ブレイクアップ 牡 4 歳 アルゼンチン共和国杯 G II (2022/11/6・東京) |
| ・ホッコーメヴィウス 騾 6 歳 阪神ジャンプ SJ・G III (2022/9/17・中京) | ・ホッコーメヴィウス 騾 6 歳 京都ジャンプ SJ・G III (2022/11/12・阪神) |
| ・アートハウス 牝 3 歳 ローズ S G II (2022/9/18・中京) | ・ユニコーンライオン 牡 6 歳 福島記念 G III (2022/11/13・福島) |
| ・ゼノヴァース 牡 5 歳 東京ハイジャンプ J・G II (2022/10/16・東京) | ・グリュネグリー 牡 2 歳 ラジオ NIKKEI 杯京都 2 歳 S G III (2022/11/26・阪神) |
| ・オオバンブルマイ 牡 2 歳 京王杯 2 歳 S G II (2022/11/05・東京) | ・トウシンマカオ 牡 3 歳 京阪杯 G III (2022/11/27・阪神) |

あ・と・が・き

- ★ 昨年 10 月から実施していた 1200 m 直線砂馬場の全面的な路盤改修・砂の入替え工事が終了しました。利用開始は 3 月下旬の見込みです。工事期間中は皆様にご協力いただき、感謝申し上げます。
- ★ これから寒さも一段と本格化するなか、BTC 調教場では基礎トレーニングを重ねてきた若馬達が調教進度を上げながら体力・スピード力強化に磨きをかけています。本年も強い馬づくりに貢献する調教場として、スタッフ一同尽力してまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。※新型コロナウイルス対策も引き続きご協力の程よろしくお願いいたします。(K.H.)
- ★ 昨年 2 月に JRA 調教師を引退された藤澤和雄アドバイザーをお招きし、研修生向けに座談会を開催しました。JRA 通算 1570 勝を挙げ、「Happy People Make Happy Horse」「一勝より一生」などホースマンとしての金言を残されている名伯楽の長年の経験に沿ったお話は、競走馬の育成者を目指す研修生にとって、とても大きな刺激になりました(本文 P6-7)。また、現在の研修生たちの研修に向けた意気込みについて P17-18 に掲載しました。併せてご覧ください。
- ★ BTC 研修生は、9 月中旬に BTC 調教場周辺牧場での牧場実習を行いました。実際の育成現場を経験し、不足している知識やこれから身に付けなければならない技術などが明確になり、現時点での自分を振り返るとても良い機会となりました。実習後は、それぞれが自分の課題に向き合い、真摯に技術の研鑽に励んでいるところです。ご協力頂きました牧場関係の皆様には感謝申し上げます。
- ★ 今春の竣工を目指し、研修寮改築工事が急ピッチで進んでいます。まだ白い工事現場シートに覆われていますが、研修用厩舎の横に 3 階建ての姿を現しています。収容人数も増加の予定で、軽種馬生産育成現場の人材確保のため、少しでも多くの研修生を育てていく所存です。なお、現研修寮(道道高見西舎線沿い)の取り壊し工事を 5 月から行います。工事期間中は一時的に大きな音の発生も予想されております。ご不便をおかけしますが、引き続きご協力の程よろしくお願いいたします。(K.M.)

BTC ニュース 2023 年 (1) 第 130 号

発行 日：令和 5 年 1 月 1 日

発行 行：公益財団法人 軽種馬育成調教センター TEL 0146 (28) 1001 (代) FAX 0146 (28) 1003
〒057-0171 北海道浦河郡浦河町字西舎 528 ●ホームページ <https://www.b-t-c.or.jp>

編集責任者：安藤 士郎 編集：小林 光紀

制作・印刷：西谷印刷株式会社 〒135-0022 東京都江東区三好 2-1-4

※ BTC ニュースに関するお問い合わせは、下記の電話で受け付けております。